

ホトトギス

昭和二十四年三月二十八日運輸省特許投承認許第百二十二
期第三十二年十月十日第三種郵便物認可(毎月一回一日発行)
平成十六年八月一日発刊(第一頁七頁第八頁)

ホトトギス

八月号



旬日記

汀子

平成十五年八月三日 関西野分会

雑草の中より大文字草となる
橋出来て踊の町を近づけし
大文字草とはつきり言へるほど
顔ぶれに加はつてゐし夏休

八月三日 下萌旬会

半世紀語り継がれて原爆忌
その未明焼かれし我が家原爆忌
火星見ため夜の夜空よ天の川
沈黙の大地を結ぶ桐一葉
炎天を自転車で来し人迎ふ
八月四日 ロイヤル俳壇

病葉といへぬ瑞々しさを置く
香水の馴染まぬ一日なりしかな
香水や風の誘惑すれ違ふ
帰国子の先づ墓参てふ予定組む
あつさりとした香水を旅立に
八月五日 有恒倶楽部

今日明日といへぬ蕾も女王花
近づいて来るてふ火星夜の秋
一つづつ片づく仕事夜の秋
稲妻や山の稜線近づけて
見慣れたる月下美人とまだ言へず
書き終へし稿よみ返す夜の秋

限りなき宇宙の話夜の秋
空間も時間も未来夜の秋
鶴の鳴けば一日の幸呼ぶと
今日のことほば片付きぬ夜の秋
八月五日 無名会

いつまでも追はるる仕事秋近し
その中の火星近づく星月夜

火星見ため旅程や秋近し
ふたたびの三瓶の夜空星月夜
旅ごころ育ちゆくかに秋近し
会ふたばに増えゆく会話星月夜
八月九日 鶴田幾美 御主人様
笑 顔 又 甦りたる 秋 灯 下

八月九日 北海道ホトギス同人会
一望の街霧に消え霧に現れ
刻々の台風進路聞きて旅
街の灯と別に鳥賊釣火を俯瞰
日本の空の荒るも秋に入る
旅先へ台風進路向けはじむ
八月九日 北海道ホトギス俳句大会前日旬会

露けしや欠航怖れたる早出
今しがた虹の立ちしと迎へられ
八月十日 北海道ホトギス俳句大会
台風の残せし雲を裂く朝日
修院の生計 偲ぶも秋の風
蝦夷の秋ここにも深き祈りあり
八月十二日 大阪倶楽部

稲妻や大地に風の音沈め
順延となりし火花も危ぶまれ
初秋には覗き込むてふ仔細
初秋や庭の春秋活けし草
初秋の荒れたる空の端を旅
八月十二日 綿業倶楽部

風荒き文月の旅となりけり
火星見て文月の夜を更かしけり
岳麓の秋の夜空に旅心
八月十六日 時雨 夏潮 合同稽古会
あるべきがなかりし富士よ霧の中
墨筆の表札濡らす秋の雨
やぶれ傘ありて露けき荘のもの
ここにわが青春ありき露の荘

秋声を包む山雨の荘となる
さわやかに山気まとひて雨に着く
露けしや岳麓にゐて富士見え
第二旬会
露けき灯湖の広さを明かしをり
夜の帳露の山荘にも下りし
八月十七日 稽古会 二日目

朝霧のすべる湖面の紫に
富士隠す霧に吸はれてゆく鳥
朝露を宿すもの又こぼすもの
八月十七日 井上哲王様
三瓶野の露けし偲ぶことばかり
八月十八日 アサヒカルチャー
爽やかに雨止んでゐし朝かな
旅疲れ消え新涼の目覚かな
弔電を打ちて家居の露けしや
八月二十一日 清交社

秋暑し身軽な旅の待つてみし
岳麓の露に濡れ来し旅衣
はや次の旅のいざなひ天の川
底紅の紅を結びて夕べ来し
霧の旅終へ旬日の家居かな
八月二十三日 北信越ホトギス俳句大会前日旬会
爽やかに仕事忘るること旅
消息を聞き露けしと思ひけり
秋暑くとも快晴の旅路かな
八月二十四日 北信越ホトギス俳句大会
火星見る露けき逢瀬なりしかな
露抱く草抱かぬ草古墳道
八月二十一日 野分会

大文字草の小さき花の大
すく踊れさうに現はれ来りけり
踊より抜けて一人の下駄の音
秘境とは咲き群るる大文字草

虚子生誕百三十年 稲畑汀子

平成十二年、虚子の誕生日に合わせてオープンした芦屋の虚子記念文学館にも四年の歳月が経ち、今年の二月二十二日には五年目を迎える。

「その日にシンポジウムをひらいて那智の森プロジェクトを立ち上げたかどうかしら」

「でも、三月二十日は芦屋国際俳句祭でしょう?」

「そっただけど、でも一月ありますよ」

「それは矢張り無理でしょう。先生は国際俳句祭で『丘に立つ』という講演をされるのでしょうか。その準備の他にも汀子先生は沢山の仕事を抱えていらっしやるのに」

「大げさな事にしないで、地道にすればいいのではないかしら」
相談があるからとお願いして来て下さった稲岡長さんはあくまで慎重であった。

「じゃあ、地球ボランティア協会の稲畑誠三さんと相談してからしましょう」

さっそく電話で呼び出された誠三が来てくれて話が進んだ。

「実は、この間NHKのテレビに出て居られた先生が、自然に関

する素晴らしい話をされていました。どうせシンポジウムを開くのならばあの先生が参加して下さると嬉しいなあ」

「え? 何ておっしゃる方ですか」

「それが、夏潮句会のメンバーの西橋アナウンサーがインタビュウをされていたのです。確か安田先生でしたか、梅原猛先生の愛弟子ということでした」

「じゃあ、西橋アナウンサーに電話してお訊ねして見ましょう」

話ほとんどん拍子に進んでいよいよ本格的に会の準備が始まった。しかしシンポジウムだけでは素気ないからと私が皮切りに、「神にませば」と題し短い講演をすることになった。シンポジストには環境考古学の安田喜憲、森林研究所で森林環境部長をしておられた藤森隆郎、歌人エッセイストの梅田恵以子の各先生方に、コーディネイターは稲岡長さんというメンバーが揃った。場所は虚子記念文学館地下の多目的ホール。仕切りを取れば百から百二十人程の人数が入場出来る。

電話の申し込みを受けつけると百人に近い申し込みは忽ち一杯になった。廊下にはみ出してもいいから申し込んで頂いた方はお断りしないようにと言い聞かせてあったのに、やはり齟齬があつて失礼してしまったことがあつたことが後で分つてがっかりした。

会場は舞台を運び入れ、机も入れた席、椅子だけの席、折り畳みテーブル付き椅子を配置よく並べると見違えるような会場が完

成した。初めて使うマイクも包みを解いてシンポジストの机の前に揃えた。演台を向って左手に置き我が家から持って来たスタンドを置いた。それは先生方から依頼のあったOHP、パワーポイントのために会場の電気を消した時のスタンドである。機械の操作は地球ポランティアの若い助手が二人来てくれることになった。記念館の小林学芸員と山脇、大沢司書たちも待機してくれることになっていた。

開会三十分前の十二時半には安田先生が会場に来られ、挨拶をした。気さくな方で、少し緊張して挨拶をしたがいつぱんに気持ちほぐれて行った。

「御高名な安田先生はともお忙しいと伺って居りましたので、本当に来て頂けるか心配でした。本当に有難うございました。とても皆さん楽しみにしていらっしやいます」

「いやあ、うちらこそよろしく」

何とも楽しい雰囲気を持つている方だと嬉しくなった。

後の二人の先生は事務室の隣の部屋へご案内するようには言っていたためか、まだ会場には来られていなかった。開会の一時はすぐに来てしまった。司会の誠三が開会を宣言するまでに、私はOHPフィルムを中央のプロジェクターの横へ持って行った。そこに誰も居ないのが気になったがあつという間に私の講演の紹介が始まってしまった。

「稲畑汀子でございます……」

虚子の那智の滝の句を私なりに読み解いてそれが日本人の魂の

シンボルであること、自然をまもるのは自然から学んで来た俳人たちがやって行かなければならないこと。西洋の人達の自然に對する姿勢と自然と共に生きる我々日本人の自然に對する態度には違いがあることを述べた後「特に俳人達はそうでなければなりません……。ここでOHPをお願いします」

と、言つたまではよかつたが、OHPのプロジェクターの周りに誰も居ないのはつととした。部屋の電気を消すためにスイッチの側に稲岡長さんの姿が見えた。私は咄嗟に、

「先生、OHPお願いします！」

その時、舞台の机に座つていた安田先生が、

「はいはい」

と言いながらOHPの機械の前へ降りて来て操作して下さつた。

「安田先生、恐れ入ります」

部屋が暗くなって前のスクリーンにOHPが映し出された。

気さくな安田先生に助けられて二十分の短い講演は無事に終つた。

「素晴らしいシンポジウムでしたねえ」

充実したシンポジウムの時間はすぐに経ってしまった。

廊下まで溢れた聴衆の熱気が覚めないまま、口々に感想の声を交わし合いながら、第二部、正岡明夫人のコンサートの会場へと席を移した。

廣太郎句帳

廣太郎

八月十六七日 虚子山荘夏潮会 時雨会合同稽古会

レイテ湾武蔵眠るや星月夜

五十年前の語り部 月見草

八月二十三二十四日 北信越ホトギス同人会大会

もてなしといへど夏炉の燃え過ぎて

母となる人に秋蟬優しかり

又来よと虚子が隠せし霧の富士

その中の大樹は法師蟬のもの

八月十九日 草木瓜会

露の世に火星怪しく輝けり

平成十五年八月四日 俊英句会

木槿垣一花一花に日をとどめ

八月二十六日 若水会

原爆忌前の静けさありにけり

立秋の都心に日射なかりけり

丸ビルを指呼に秋蟬果てにけり

打水に祇園の路地の暮れ初むる

さりげなく木槿咲かせて売家かな

撫子やそのまま飛んで行きさうな

八月六日 一水会

立秋の窓に張り付く雨雫

稲妻に火星の呼応してをりぬ

甲子園球場夜の秋に沸く

今日の秋もう渋滞の始まり

山門を結界として秋の蟬

八月十四日 土筆会

底紅に羽音沈めしもの数多

八月三十一日 夢二忌全国俳句大会前夜句会

地球食むやうに西瓜を食うてをり

八月二十一日 登高会

大花野風を平らにしてをりぬ

新涼の丸ビルに人閑散と

星月夜平家滅びし日も燃ゆる

又一人木道逸れて花野人

草市の立ちて戦後でありにけり

ラテン語の墓碑銘古りて墓洗ふ

夢二めく人ゆらゆらと花野道

姉よりも大きな口で西瓜食む

その中に赤く妖しく星月夜

語り継ぐべし花野忌といふ一会

ビル風といふ新涼の丸の内

星月夜三瓶に彼はもう居らず

榛名富士正しく霧の登りゆく

雑詠 汀子選

登るほど谷に落ち込む花の雲
 一枝だに揺れず花冷つゝのる闇
 みよし野の落花とどめて冷ゆる闇
 荒地にも色置き初めし二月かな
 春の星早や一周忌迎へたる
 虚子館は我の里山梅香る
 遠山に霾りぬしは昨日まで
 連山に近づくほどに吾も霞む
 一天の下にほろりと初桜
 秘かにも息をしてゐる花の闇
 朝が来て花一斉に軽くなる
 みよし野の落花ただよふ日の別れ
 おらが村市となる話水草生ふ
 初花の咲きふえて客ふえて午後
 初桜風は夕べに移りつつ
 一夜さの旅の雨音西行忌
 花冷の墓前に人の絶え間なく
 摘草の影のびちぢみ姉妹

京都 安原 葉
 同 同
 東京 稲畑廣太郎
 同 同
 同 今井千鶴子
 同 同
 榎原 稲岡 長
 同 同
 同 同
 神戸 山田弘子
 同 同
 同 同
 東京 山田閨子
 同 同

似し坐像似ぬ坐像ある虚子忌かな
 花篝雨の名残はありながら
 のぼり来し月に暈あり夕桜
 椿落つ水面の硬さありにけり
 さ緑の兆すくれなゐ楓の芽
 咲きすすむ桜雨をもためらはず
 山を焼きたつき山焼見るあそび
 野火叩戦旗のごとくかかげゆく
 捨て野火の美しければ踏みけり
 無精髭剃らぬ意地あり落第す
 卒業の耳を離れぬ歌ひとつ
 卒業すギターの弦の切れしまま
 花翳の揺れて満ちゆくものばかり
 旧兵舎とは囀の中にあり
 囀の下に巢箱の穴昏し
 逆縁の児の歸りくる彼岸かな
 しやぼん玉一瞬万華鏡となる
 一片の落花と一掬の風と
 初花に見えて卒寿なりし吾
 今日はしも初蝶に逢日誕生日
 視線措くところ花ならざるはなし
 馬の仔の眉間の星のただならず
 仔馬生れ蝦夷の駿馬と脚長し
 道産子と呼ばれ仔馬の脚太き

神戸 三村純也
 同 同
 同 同
 龍ヶ崎 今橋真理子
 同 同
 熊本 岩岡中正
 同 同
 同 同
 群馬 木暮陶句郎
 同 同
 同 同
 東京 坊城俊樹
 同 同
 同 同
 京都 粟津松彩子
 同 同
 同 同
 姫路 桑田青虎
 同 同
 同 同
 東京 坊城としあつ
 同 同

雑詠句評（七月号より）

千鶴子・保佳・葉

忠彦・青虎・芳子

明倫・憲明・中正

美奇・静龍・汀子

六千年の歴史の岸をとかげ遣ふ 東村山 村松紅花

中国の歴史は四千年とも五千年ともいう。西暦は紀元後やつと二千年、紀元前四千年といえは弥生時代か。六千年前といえは、古代文明の頃からの歴史のある所だろうが、一体どこなのだろう。

ルール違反かも知れないが、とても分からないと降参して作者に伺うこととした。

これはエジプトです、とのこと。ナイル河を下る旅をなさった時・河畔の岸で蜥蜴を見た、とおっしゃった。世界に約三千種いる蛾蜴のうちどの種類か、とか、色は、とかは一切伺わなかった。句の鑑賞にはそんなことは全く関係ない、と思つたから。本当は場所も伺わなくても良かったのかもしれない。でもエジプト、ナイル河畔と知ると、そこに這つていた爬虫類というだけ

で、十七音の短詩の中に人類の歴史が感じられるように思うのは、私の考え過ぎだろうか。（千鶴子）

紀元前四千年という古い歴史の国を訪ねた作者である。今その歴史を伝えている国の岸を這つているとかげにも特別な感慨を持つて見ているのである。気も遠くなるような遠い昔の歴史の中でほどの様になつていたのか計り知れない。とかげが這つているのを見てからの作者の興味の推移が想像される句である。（汀子）

辛き過去楽しき行方うらゝかや 東京 吉田小幸

辛かつた過去、そして楽しいであろうこれからの行方を考えるとしみじみと、うららかな気分になれる、という感懐を述べた一句であろう。林芙美子の

「花の命は短くて苦しきことのみ多かりき」

という詩もあるが人によつては過去は辛く苦しいものであるかも知れない、しかしこの苦い経験があつてこそ、これから先の楽しさが期待出来るものである。結句を「うらゝかや」と置いているが流れにまかせて生きる明るさをも感じさせる佳句である。

（保佳）

麗らかな春の日であつた。心までも温かいものに満たされて行き豊かになる。辛かつた過去はもう過去として此れよりは楽しい行く先が待つてゐる。人生経験を前向きに明るく未来に向かつて行く作者らしい心持が伝わってくる。俳句はその人が自ずと現れる。麗らかという季節が語る作者の未来。（汀子）

若水集

廣太郎選

春の夜・仔馬

CDの音質春の夜のシヨパン 愛媛 浜永宗一
 洋楽を気儘に春の夜を独り 同
 妻は妻なりに抒情歌春の夜 同
 駈け曲り仔馬駈く音裏返る 旭川 大塚信太
 仔馬へも怖さの距離置きにけり 同
 仔馬駈くマツチのやうな細き脚 同
 ルーペより一字とび出て来し春夜 神戸 山田弘子
 春の夜の更けて書斎でありにけり 同
 亡き人に怨みごとなど春の夜 同
 追憶にひたる春夜のヴァイオリン 西宮 田中祥子
 忘れえぬ春夜のヴィオロンコンサート 同
 春の夜の想ひ出として遺されし 同
 春の夜や古女房の酌を諾 静岡 須藤常央
 春の夜を酌むへれけにされてをり 同
 春の夜の夫婦喧嘩でありにけり 同
 夜べ生れし仔馬に牧舎灯しあり 千葉 大木さつき
 高原の教会の鐘聞く仔馬 同
 仔馬駈けはるかな富士へ牧なだれ 同

風と跳ね風に踏ん張る仔馬かな 枚方 中嶋陽太
 仔馬の眼ときどき親を確かめて 同
 咲くものの気配残りし春の夜 同
 文書いてあとは余りぬ春の夜 香川 湯川 雅
 春の夜の卓地酒党ワイン党 同
 牧草の揺れ馬の子の風となる 同
 ネオン街ぶらりと歩く春の夜 伊万里 田中南嶽
 春の夜や青年の夢聞く宴 同
 淡泊な父の独酌夜半の春 同
 相談は妓等の行く末春の夜 東京 吉田小幸
 話しつゝ淋しくなりぬ春の夜 同
 言葉なく帰す空しさ春の夜 同
 そのことにつかずはなれず春の夜 龍野 浅井青陽子
 戦前の小城下談議春の夜に 同
 はや駆けて仔馬の群の岬の岸 同
 みよし野の木霊の誘ふ春の夜 十日町 千原叡子
 春の夜の空耳となん騎馬の音 同
 みよし野の春の夜こめて潜むもの 同
 歓迎の仔馬の跳ねに馴れるまで 釧路 小川公巴
 成長の姿 暇に仔馬撫で 同
 留守を守る奥行十間夜半の春 同
 ノサップの岬を牧に親仔馬 唐津 三関きよし
 牧広し仔馬自由をもて余す 同
 この中に名をなす仔馬幾頭ぞ 同

若水集句評+α 廣太郎

CDの音質春の夜のシヨパン 愛媛 浜永宗一

シヨパンのピアノ曲をCDで聴いているのであろう。ノクターンであれば正にびったりであるが、ここで着目したのは「CDの音質」という言葉である。名ピアニストが奏でているのはあくまでも再生装置を通した音で、往年のピアニストのSP複製盤であればスピーカーからはスクラッチノイズに溢れた貧しい音が聞こえてくるであらう。又現在はCDが主流であるが、オーディオマニアの中では未だ昔のアナログディスクの音質の方が上であるという人もいて、そんな「音質」にもこだわっている作者なのかも知れない。

仔馬駆くマツチのやうな細き脚 旭川 大塚信太

筆者はあまり競馬には詳しくないが、サラブレッドなどの競走馬の脚はすらりと形良く細いのをテレビで見た事があり、もちろん「仔馬」もより細いすらりとした脚なのであろう「マツチのやうな」とは少し大袈裟なようにも見えるが、ここまではつきりと表現した事により、一層この季節颯爽と駆ける季節の姿がスピー

ド感を伴って目の前に迫ってくる。

春の夜の卓地酒党ワイン党 香川 湯川 雅

居酒屋で、それぞれに好きな酒を注文して楽しんでいる。世界各国のいろいろな酒や料理が手軽に楽しめるのも居酒屋の醍醐味のひとつであらう。わいわい騒いでいる楽しい季節の様子が窺える。もうひとつ、自宅で何世代かが囲む食卓。父は地酒、そして息子はワイン。孫は焼酎、いやジュース。こちらは少し静かな雰囲気だらうか。筆者は何故か最初に後者の景を想像してしまっただが、そうなるそれぞれに合った肴を作っている母と嫁の厨の修羅場もユニークに想像出来る。

春の夜の空耳となん騎馬の音 神戸 千原叡子

作者の他の二句からの推察であるが、奈良県吉野山である。桜の名所として有名であるが、南朝の哀史の舞台としても有名で、オカルティックな伝説も多々ある場所なのである。その中のひとつ、落ち武者となつて吉野で果てた武将の怨念が、夜な夜な騎馬に乗って吉野を駆け巡る、という話があり、奇しくも筆者と共にその音を確と聞いたのである。これも季節のひとつの姿である。